

大学生の喪失体験における意味づけの過程

松本真知

(山口大学大学院教育学研究科)

問題と目的

Worden (2008) は、喪失による悲嘆から回復する過程には行きつ戻りつしながら取り組むべき「課題」があり、段階説が解くような直線的な過程ではないと批判している。また Gillies&Neimeyer (2006) の意味再構成理論では、自分や他者、世界などを理解するための意味構造が崩れた際、喪失体験を意味づけで再構築し、喪失による苦痛は軽減される。しかし軽減されない場合はさらに意味づけが行われるため、直線的ではない円環的な理論といえる。本研究は、死別体験においてどのような過程で意味づけが行われるのかを明らかにすることを目的とする。

方法

調査対象者 大学生9名(男性4名,女性5名;平均年齢20歳, $SD=1.66$)のうち死別体験者3名(以下A,B,Cさんとする)。

調査手続き 1人当たり30分~2時間程度の半構造化面接。対象者の許可を得て録音し逐語記録を作成。

質問項目 やまだ・河原ら(1999)を参考に喪失体験について時期ごとに状況や気持ち、考えを以下の項目について尋ねた。①具体的状況, ②予測(死別, 失恋のみ), ③失った人との関係, ④苦痛度曲線への記入, ⑤苦痛の変遷, ⑥喪失前後での変化, ⑦支えの有無, ⑧意味づけ, ⑨意味づけのきっかけ・時期, ⑩現在の気持ちや考え。

分析方法 複線経路・等至性モデル(TEM)を用いた。

結果

死別体験に対する気持ちや考えが、体験当時から〈意味づけ〉へと向かい、現在に至るまでどのように変化するかを図示した(図は省略)。

- 1)死別当時 〈ネガティブな感情〉や〈後悔〉の念を抱いており、〈死を受容できない〉状態にある。
- 2)葬儀時 故人の死を通して死の身近さを感じ、〈死生観の変化〉が生じることで〈意味づけ〉に至って

いた。一方でCさんには[さまざまな気持ちが相反する]状態も認められた。

3)葬儀後 Aさんは、「故人の人生を振り返り」自分の人生と比較して「故人のように楽しい人生を送りたい」と[気持ちを切り替えようとする]ことで〈意味づけ〉に至った。

4)死別後1,2ヶ月 「できるだけ他のことに集中しようとする」など日常生活に目を向ける一方で、〈故人を想起〉する側面もみられた。

5)死別後1,2ヶ月~現在 Aさんは命日に「もっと会いに行けばよかった」と後悔したが、現在では故人の存在は「自分の励まし」となっている。Bさんは周囲の人々に影響を受けて[死を受容]していき、現在は「故人との思い出をいい思い出」としている。Cさんは、〈故人を想起〉する一方、[故人の存在が薄れていく]のを感じて〈死生観の変化〉が生じ、〈意味づけ〉に至った。しかし現在も「故人のことがずっと心の中にある」と感じている。

考察

死別体験における意味づけは、死別体験によって引き起こされるネガティブな感情を抱えながら、故人の死と自分自身を関連づけて考えることと日常生活に適応していくことを繰り返しながら行われていくことが示唆された。これは従来(武井・嶋田ら, 2011など)を支持している。また、「死」について考えることが「生」を再定義して死生観が変化し、意味づけに影響していた。ただし、意味づけによってネガティブな考えや感情が必ずしもなくなるわけではないが、自分にとって適応的な形で死を理解することができるようになると考えられる。

経験する出来事を通して意味づけが変化する可能性があるため、意味づけがその後の経験にどのように影響し、さらに意味づけをどのように変化させていくか、縦断的に検討していく必要がある。